

## 尾田太良先生のご逝去を悼む

山崎 誠



日本古生物学会特別会員の尾田太良先生（東北大学名誉教授）は、ご病気にて療養中のところ、平成27年10月25日に逝去されました。享年69歳でした。学生との議論を好み、教育と研究の師であり続けた先生のご活動を記し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

尾田先生は1946年（昭和21年）に大阪府で生まれ、仙台第一高等学校を経て秋田大学鉱山学部鉱山地質学科を1969年に卒業されました。その後、東北大学大学院理学研究科に進学され、静岡県相良・掛川地域に分布する中新統～鮮新統の浮遊性有孔虫化石層序の研究を手始めに、浮遊性有孔虫化石層序の研究に取り組みられました。その後博士課程に進み、房総地域の最上部新生界の浮遊性有孔虫化石層序を取り纏め1974年4月に理学博士の学位を取得の後、引き続き新第三系の浮遊性化石層序研究を推進されました。

1976年、東北大学理学部の助手に着任され、1984年には10ヶ月にわたって在外研究員としてニュージーランドと米国に出張されました。その後、1986年に熊本大学理学部に助教授として赴任、1993年に同大学理学部教授となられ、14年間に渡って同大学に勤められました。2000年10月からは東北大学理学部教授として、2009年3月ご退職までの8年間に勤められました。また、2003～2009年には日本古生物学会評議委員をされたほか、IODP理事、IODP MI Alternate Governorなど数多くの委員を務められました。

先生は一贯して浮遊性有孔虫化石の研究に取り組みました。斎藤常正先生によっておこなわれた同化石の本邦初の新第三系の国際対比（Saito, 1963など）に続いて、Blow（1969）による熱帯から亜熱帯の化石層序を本邦層

序に導入する取り組みを積極的に推進されました。なかでも、本邦を代表する中新統～更新統の層序が分布する房総半島や掛川地域、高崎地域（Oda, 1977）、東北地域から関東地域にかけて上部新生界微化石層序に基づく地質年代の確立に貢献されました（尾田・酒井, 1977など）。また、高緯度と低緯度の化石層序の違いに注目し、本邦を含む中緯度北西太平洋海域で有効となる微化石種群を統合した化石層序を確立されました（Oda *et al.*, 1984）。この研究からは、後に続く黒潮～親潮海域での古海洋学的研究の端緒が窺えます。

熊本大学に移られてからは、学生とともに野外調査に励まれ沖縄本島地域や宮古島地域の島尻層群、宮崎地域の宮崎層群などの上部新生界の研究で成果を上げられています。その中で、宮崎地域の鮮新統～更新統層序確立のために、古地磁気層序やテフラ層序と組み合わせる複合層序の手法を、門下生とともに着手されました（鳥井・尾田, 2001など）。東北大学へご異動後も宮崎地域に関する研究は継続され、石灰質ナノ化石層序を加えることで宮崎層群最上部に第三紀/第四紀境界を認めるなど複合層序を確立されています（Morimoto *et al.*, 2010, Oda *et al.*, 2011）。また、同層群上部の古環境についても門下生とともにとり纏められました（千代延ほか, 2012）。先生は、野外調査を重視され、微化石層序確立には正確な試料採取と確かな岩相層序が大切であることを常々指導されていました。そのため、宮崎層群の調査では、南国とはいえ雪の舞う12月に胸まで水に浸かりながらの沢歩きや、崖のトラバースなど、還暦を過ぎての調査とは思えないほどの行動力であったそうです。

また、先生は浮遊性有孔虫の示相化石としての側面にも注目され、化石のみならず第四紀後期以降の浮遊性有孔虫の地理分布についての研究にも着手されました。日本周辺海域の海洋表層堆積物より得られた浮遊性有孔虫群集の地理的分布と、ピストンコア試料を用いた第四紀後期の有孔虫群集変化の詳細な検討による本州南方海域の黒潮流路の復元（尾田・嶽本, 1992など）や、統計解析手法を用いた黒潮～親潮海域の古水温計の確立（Takemoto and Oda, 1997）、東シナ海での過去3～4万年にわたる黒潮流路と淡水流入の変遷をとり纏められました（Xu and Oda, 1999など）。さらに、堆積物中に認められる浮遊性有孔虫化石が示唆する環境をより詳細に明らかにするという観点から、セジメントトラップ実験により得られた浮遊性有孔虫の季節による種構成や現存量の変動（尾田, 1989など）や、プランクトンネットを用いた現生浮遊性有孔虫の海洋中での深度分布や季節分布の研究にも着手され、日本近海での浮遊性有孔虫の生態に関しての基礎情報の収集を進められました（Tsuchihashi and Oda, 1998など）。私が先生の研究室への配属を希望したのはちょうどそのころのことで、研究

室での多様な時間軸で展開される話題に混乱しつつも、地質学への興味を持ったことを記憶しています。尾田先生といえば豊かな髭を蓄えられた姿が印象深いです。熊本大学に移られてから間もない、1988年のODP（国際深海掘削計画）Leg122への乗船をきっかけに、髭を伸ばすようになったそうです。私が尾田先生とお会いした際は、すでに見事な髭の貫禄あるお姿でしたが、研究室の先輩方によれば、40代前半の先生は童顔で学生と見分けもつかないほどであったため、髭を蓄えられるようになったと聞き及んでいます。また、尾田先生と言えば船に弱いという印象が強く、先生ご自身も東北大での助手時代は、当時の東京大学海洋研究所の淡青丸に乗船されご苦労されたと、よく話しておられました。しかし、東シナ海でのプランクトンネット試料採集のために、1995年8月に鹿児島大学水産学部附属練習船かごしま丸の航海にご一緒した際には、迫り来る台風による時化の中で、近隣の港に待避入港するまでの間、一切船酔いの徴候を見せられることもなく、船に弱い私はとても口惜しく感じた（失礼な話ではありますが）ことをよく憶えています。

2000年に東北大学に戻られてからも、現生浮遊性有孔虫の研究を継続されるとともに（Oda and Yamasaki, 2005など）、北西太平洋の中新世後期以降の古環境復元にも取り組まれました（Sato *et al.*, 2008など）。また、第四紀後期の浮遊性有孔虫群集を用いた日本周辺海域の古環境復元で長らく混乱のあった、*Neogloboquadrina pachyderma*の石灰質殻の巻き方向と*Neogloboquadrina incompta*の分類に関する問題を総括されました（尾田・堂満, 2009）。他方では、2004年に東北大学にて実施された第1回の「古海洋研究を志す学生のための微化石サマースクール」の実行委員長をつとめられ、その後の多くの若い学生達が微化石研究に触れるきっかけづくりもされました。

先生は、古都・奈良の宮大工にゆかりのある生い立ちになぞらえて、よくご自分のことを職人と形容されていました。微化石層序による地質年代決定という、あたかも定型作業を重ねるかのような自分を皮肉まじりに表現されたものとも思われます。しかし、大学院生のころから後輩学生の岩石試料より抽出された有孔虫化石を数多く検鏡するなかで培われた経験と知識は、先生の思考の根幹をなすもので、門下生はその言葉の裏にある、野外調査で得られた証拠を大切にせよという強い信念を感じることができたように思います。こだわりのツァイス社製の実体顕微鏡と、書籍と書類で埋め尽くされた研究室でのお姿が今でも目に浮かびます。また、先生といえば酒豪の逸話は数え切れないほどで、先生と親交のあった方や門下生であれば知らないものはないことでしょう。普段ろくな食事にありつけない学生達を気にかけてくださったのか、研究室で賑やかに食事会をしたりお酒を酌み交わしたりする機会が多かったように思います。そのような先生の気さくなお人柄も研究室で学ぶ門下生に

とって魅力でした。

先生の研究室では、毎年3月25日の卒業式の後に、先生のご自宅で催される、卒業祝いと先生の誕生祝いが恒例となっていました。お祝いは熊本大学から東北大学に移られてからも行われていたようです。ご自宅で、奥様俊子様のできばきと学生と一緒に料理を準備される様子を拝見しては、奥様の支えあつての先生であったのではないかと思います。

東北大学ご退職後は、2010年から亡くなる数ヶ月前まで、石巻専修大学で非常勤講師として教鞭をとられ、懇切丁寧に学生達に地球科学のおもしろさを伝えておられたようです。受講生の名前を覚えようと写真に名前を添えた出席簿を準備されていたことや、ご自宅に飾られている、受講生から贈られたにこやかな表情の学生に囲まれた集合写真からうかがい知ることができます。熊本大学当時の先生の指導は、決して言葉数の多いものではなく、学生はどちらかといえば放任されがちでした。卒業研究や修士研究のとりまとめの時期である年の瀬には、研究室内のゼミで繰り出される「(卒業・修了するには)あと一年やな」の発言に学生は戦々恐々としていました。今思えば、論文をとりまとめる一歩手前での学生のふんばりを鼓舞されていたのだと思います。石巻専修大学での先生の講義の姿は、先の写真やご自宅に遺された膨大な講義資料などから推測されるように、私たち門下生にも見せることのなかったような、気配りに厚い講義だったのではないのでしょうか。また、御退職後にも門下生とのゴルフや忘・新年会に気さくにお付き合い下さり、先生を慕って仙台を訪ねる学生やその家族をいつも快く迎えて下さいました。

69歳というまだ早すぎる訃報に、今はただ悲しくてなりません。あらためて、これまでに賜ったご指導に深く感謝申し上げますとともに、これからはゆっくりとお休みくださいますよう、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

本追悼文を書くにあたり、湯本（旧姓 小林）万里子、嶽本あゆみ、鳥井真之、堂満華子、千代延俊の皆様からご協力いただきました。

## 文献

- Blow, W.H., 1969. Late Middle Miocene to Recent planktonic foraminiferal biostratigraphy. In Bronnimann, P. and Renz, H.H., eds., *Proceedings of the First International Conference on Planktonic Microfossils (Geneva, 1967)*, 1, 199-421.
- 千代延俊・森本隼平・鳥井真之・尾田太良, 2012. 宮崎層群上部の石灰質微化石に基づく、鮮新世/更新世境界付近の海洋環境変遷. *地質学雑誌*, 118, 109-116.
- Morimoto, J., Oda, M., Torii, M., Chiyonobu, S., Shibuya, H. and Domitsu, H., 2010. Integrated stratigraphy of the Middle to Late Pliocene upper Miyazaki Group, southern Kyushu, Southwest Japan. *Stratigraphy*, 7, 25-32.
- Oda, M., 1977. Planktonic foraminiferal biostratigraphy of the Late Cenozoic sedimentary sequence, Central Honshu, Japan. *Tohoku*

- University Scientific Report, 2nd series (Geology)*, **48**, 1–72.
- 尾田太良, 1989. 日本海溝セメントトラップ (JT-01, JT-02) 中の浮遊性有孔虫群集. *海洋*, **21**, 221–227.
- Oda, M., Chiyonobu, S., Torii, M., Otomo, T., Morimoto, J., Satou, Y., Ishikawa, H., Ashikawa, M. and Tominaga, O., 2011. Integrated magnetobiochronology of the Pliocene-Pleistocene Miyazaki succession, southern Kyushu, southwest Japan: Implications for an Early Pleistocene hiatus and defining the base of the Gelasian (P/P boundary type section) in Japan. *Journal of Asian Earth Sciences*, **40**, 84–97.
- 尾田太良・堂満華子, 2009. *Neogloboquadrina pachyderma* と *Neogloboquadrina incompta* の古海洋学的意義. *化石*, **86**, 6–11.
- Oda, M., Hasegawa, S., Honda, N., Maruyama, T. and Funayama, M., 1984. Integrated biostratigraphy of planktonic foraminifera, calcareous nannofossil, radiolarians and diatoms of middle and upper Miocene sequences of Central and Northeast Honshu, Japan. *Paleogeography, Paleoclimatology, Paleoecology*, **46**, 53–69.
- 尾田太良・酒井豊三郎, 1977. 旗立層中・下部の微化石層位—浮遊性有孔虫・放散虫—. 藤岡一男教授退官記念論文集, 441–456.
- 尾田太良・嶽本あゆみ, 1992. 浮遊性有孔虫からみた黒潮流域の過去2万年間の海洋古環境. *第四紀研究*, **31**, 341–357.
- Oda, M. and Yamasaki, M., 2005. Sediment trap results from the Japan Trench in the Kuroshio domain: Seasonal variations in the planktic foraminiferal flux. *Journal of Foraminiferal Research*, **35**, 315–326.
- Saito, T., 1963. Miocene planktonic foraminifera from Honshu, Japan. *Tohoku University Scientific Report, 2nd series (Geology)*, **35**, 123–209.
- Sato, K., Oda, M., Chiyonobu, S., Kimoto K., Domitsu, H. and Ingle Jr., J.C., 2008. Establishment of the western Pacific warm pool during the Pliocene: Evidence from planktic foraminifera, oxygen isotopes, and Mg/Ca ratios. *Paleogeography, Paleoclimatology, Paleoecology*, **265**, 140–147.
- Takemoto, A. and Oda, M., 1997. New planktic foraminiferal transfer functions for the Kuroshio-Oyashio Current Region off Japan. *Paleontological Research*, **1**, 291–310.
- 鳥井真之・尾田太良, 2001. 鹿児島県に分布する伊作火砕流堆積物と宮崎層群に挟在する凝灰岩との対比—宮崎層群の複合層序にもとづく噴出年代とその意義—. *地質学雑誌*, **107**, 379–391.
- Tsuchihashi, M. and Oda, M., 1998. Vertical distribution of living planktic foraminifera in the north equatorial current domain. *Kumamoto Journal of Science (Earth Science)*, **15**, 19–26.
- Xu, X. and Oda, M., 1999. Surface water evolution of the eastern East China Sea during the last 36,000 years. *Marine Geology*, **156**, 285–304.

